

拝啓

寒さも日一日とやわらぎ、日差しの中に微かな春の匂いが感じられる今日このごろとなりました。お元気ですか。

先日のお手紙楽しく拝見させていただきました。とくにハンバーグ・ステーキとナツメグの関係についてのくだりは生活感にあふれたなかなか良い文章だと思います。台所の暖かい匂いや玉ねぎを切るとんという包丁の音が生き生きと感じられるのです。そういうところが一箇所でもあると、文章が生きてきます。

あなたのお手紙を読んでいるうちにハンバーグ・ステーキがたまらなく食べたくなり、さっそくその夜近所のレストランに行つて注文してみました。そのレストランには実に八種類ものハンバーグ・ステーキがありました。テキサス風とか、カリフォルニア風とか、ハワイ風とか、日本風とか、そういった感じですが。テキサス風というのはとても大きいんです。それだけのことです。そんなことを知つたら、テキサスの人たちはきつとびっくりしちゃうでしょうね。ハワイ風というのは、パイナップルがあしらつてあります。カリフォルニア風というのは……忘れしました。日本風には大根おろしがついています。店は洒落た造りで、ウエイトレスはみんなけっこう可愛くて、とても短かいスカートをはいています。

しかし僕はなにもレストランの内装の研究をしたり、ウエイトレスの脚を眺めたりするためにそこに行 **92** ったわけではありません。僕はただハンバーグ・ステーキを、それもなに風でもないごく単純なハンバーグ・ステーキを食べに行つたのです。

僕はウエイトレスにそう言いました。僕が食べたいのはごく普通のハンバーグ・ステーキなのだ。

申しわけありませんが当店にはなにに風巾というハンバーグ・ステーキしかないのです、とウエイトレスは答えました。

でももちろんウエイトレスを責めることはできません。彼女がメニューを決めるわけでもないし、彼女が好んで食器を下げるたびにふともが見えちゃうような制服を着ているわけでもないからです。ですから、僕はにっこり笑つてハワイ風ハンバーグ・ステーキというのを注文しました。食べる時にパイナップルをどけちゃえばいいのよ、と彼女が教えてくれたのです。

世の中というのは奇妙な場所です。僕が本当に求めているのはごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなのに、それがある時にはパイナップル抜きのはワイ風ハンバーグ・ステーキという形でしかもたらされないのです。

ところであなたを作つたのは、ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなん **97** でしょうね。手紙を読んでいて、僕はあなたの作つたごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを是非食べてみたくなりました。

それに比べると国電の切符自動販売機についての文章は少し上すべりではないかという気がします。目のつけどころは面白いと思うのですが、風景が読み手に伝わつてこないのです。どうか鋭くあるうと思わないで下さい。文章というのは結局は間にあわせのものなのです。

全体としての今回の手紙の点数は70点というところですが、少しずつ文章力は上がっています。焦らず、焦らず、がんばつて下さい。次の手紙を楽しみにしています。はやく本物の春が来るといいですね。

3月12日

93

P・S・

「クッキー」の詰めあわせ、どうもありがとうございます。手紙以外の個人的な交流は一切禁じられておりますので、今後このようなお気遣いなきようお願いいたします。

でもとにかく、ありがとうございます。

*

といったアルバイトを僕は一年ばかりつづけた。二十歳の頃のことである。

僕は飯田橋にある「ペン・ソサエティー」という名前のわけのわからない小さな会社と契約していて、一通二千円の約束でひと月に三十通以上のこれと似たりよつたりの手紙を書きまくつた。

「あなたも相手の心に響く手紙を書けるようになります」というのがこの会社のキャンチ・フレーズだった。入会者は入会金と月謝を払い、月に四通の手紙を「ペン・ソサエティー」あてに書く。それに対して我々「ペン・マスター」が添削をし、前にあげたような感想と指導の手紙を書くのである。僕は文学部の学生課で募集の貼り紙を見てその会社の面接試験を受けにいった。僕はいろんな事情があつて、大学を留年することが決まったばかりだった。親は留年するのなら来年から仕送りを減らすと通知してきた。それで当然のことながら僕は真剣に生活費を稼ぐ必要に迫られていたのだ。面接試験があり、いくつか作文を書き、そして一週間後に僕は採用された。それから一週間かけて専門の指導員に添削のこつや、指導のノウハウや、さまざまな心得を教えられた。それはとくにむずかしいことではなかった。

女性の会員には男性の、男性の会員には女性の「ペン・マスター」がつく。僕の引き受けた会員は **94** 二十四人で、年齢層は下は十四歳から上は五十三歳まで、中心は二十五歳から三十五歳までの女性だった。つまり殆どの会員が僕より年上ということになる。それではじめの一カ月ばかり、僕はひどく混乱することになった。なぜなら会員の多くは僕よりずっと文章が上手く、ずっと手紙を書き慣れていたのである。僕といえは、それまでまともな手紙なんて殆ど書いたこともないときている。僕は冷や汗を流しながら最初の一カ月をなんとかやりこした。きつと何人かは——それは会員の権利として会則にもうたわれていたことなのだけれど——ペン・マスターの交換を求めてくるだろうと、僕は覚悟を決めていた。

しかし一カ月たっても誰ひとりとして僕の文章能力に不満を洩らす会員は現われなかった。それどころか、僕の評判は上々である、と会社の人は僕に教えてくれた。そして三カ月後には僕の「指導」によって会員たちの文章力も向上してきているようにさえ思えてきた。不思議なものである。彼女たちは心の底から僕を教師として信頼しているようだった。そう思うと、僕も講評の手紙をそれまでよりずっと気楽にのびのびと書けるようになった。

今になって考えてみるとわかるのだけれど、彼女たちはみんな淋しかったのだ。彼女たちは(あるいは彼らは)ただ誰かに何かを書いてみたかったというだけのことだったのだ。そして——その頃の僕には信じられないことだったのだが——彼女たちにはその手紙を出すべき相手さえみつけれなかったのだ。彼女たちはラジオのディスク・ジョッキーに手紙を出すタイプではなかった。彼女たちはもつとパーソナルなものを求めていたのだ。たとえそれが「添削」や「講評」のようなものであったとしてもだ。

僕はそんな具合に二十代の初めの歳月を、片足のおつとせいみたいにその微温的な手紙のハレムの中で過ごした。

会員たちは実にいろんな手紙を僕あてに送ってくれた。退屈な手紙があり、ほほえましい手紙があり、**95** 悲しい手紙があった。ずいぶん昔のことだし、残念ながら彼女たちの手紙は手元に取ってないので(それは規則としてぜんぶ会社に返還しなくてはならなかった)、はっきりと具体的には思い出せないのだが、そこには実にいろんな種類の人生の事象が——ひどく大きなことからひどく細かいことまで——ちりばめられ、詰め込まれ、放り出されていたように記憶している。彼女たちの伝えるこれらのメッセージは僕には、二十一歳か二十二歳の大学生にとっては、奇妙に非現実的なものに感じられた。それらはおおたの場合リアリティーというものを欠いているように思えたし、ある場合には全面的に無意味なことであるようにも思えた。でも僕に人生の経験が欠けているということだけがその原因ではなかった。今になってみればわかるのだけれど、ほとんどの場合、物事のリアリティーというのは伝えるべきものではないのだ。それは作るべきものなのだ。そして意味というのはそこから生まれるものなのだ。でももちろん僕にはそんなことはわからなかったし、彼女たちにもわからなかった。それも、それらの手紙に書かれたすべての物事が、僕の目に奇妙に平板に映った原因のひとつだったと思う。

わけあってそのアルバイトを辞めることになった時、僕の指導していた会員たちはみんな残念がってくれた。僕もある意味では——手紙を書きつづけるといって作業には正直なところ少々うんざりはしていたけれど——残念だった。多くの人々がこれほどまで僕に対して正直になってくれるチャンスなんて、この先二度とないような気がしたからだ。

ハンバーグ・ステーキに関していえば、僕は彼女(最初の手紙の女性)の作ったハンバーグ・ステーキを食べることができた。

彼女は三十二歳で子供はなく、夫は世間では五番めくらいに有名な商會会社につとめていた。僕が最後の**96** 手紙に残念ながら今月いっぱいでの仕事を辞めることになったと書いた時、彼女は僕を昼食に招待してくれた。ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを作ります、と彼女は書いていた。会の規則には反していたけれど、僕は思いきって行ってみることにした。何ものも二十二歳の青年の好奇心を押しとどめることはできない。

彼女のマンションは小田急の沿線にあった。子供のいない夫婦にふさわしく、さっぱりとした部屋だった。家具も照明も彼女のセーターも、高価ではないけれど感じの良いものだった。僕は彼女が思っていたよりずっと若々しくみえることに、彼女は僕が思っていたよりずっと若いことに驚いた。彼女は僕を自分より年上の男だと思っていた。「ペン・ソサエティー」は「ペン・マスター」の年齢をあかささないのだ。

しかしお互いに一度ずつ驚いてしまうと、初対面の緊張はほぐれた。我々は同じ列車に乗り遅れてしまった乗客同士といった雰囲気だ。ハンバーグ・ステーキを食べ、コーヒを飲んだ。列車といえは、彼女の部屋のある三階の窓からは電車の線路が見えた。その日はとても良い天気で、まわりのアパートのベランダは布団やシーツでいっぱいだった。時折布団を叩くばたという音がした。僕はその音を今でも思い出せる。それは奇妙に距離感のない音だった。

ハンバーグ・ステーキの味は素敵だった。香辛料がほどよくきいて、かりつとこげた表面の内側には肉汁がたっぷりとつまっていた。ソースの具合も理想的だった。正直に言って、こんなに美味しいハンバーグ・ステーキを食べたのは生まれて初めてとは言えないにせよ、実に久しぶりのことだった。僕がそう言う時、彼女は喜んだ。

我々はコーヒを飲んでしまうと、バート・バカラックのレコードを聴きながら身の上話をした。とはいっても僕には身の上話というほどのものはないから、ほとんど彼女がしゃべった。学生時代は作家になりたかったの、と彼女は言った。彼女はフランソワーズ・サガンのファンで、僕にサガンの話をしてくれ**97** た。彼女は「ブラームスはお好き」が気に入っていた。僕もサガンは嫌いではない。少なくともみんなが言うほど退屈だとは思わない。誰もがヘンリー・ミラーやらジャン・ジュネみたいな小説を書かなくてはならないという規則はないのだ。

「でも私には何も書けないわ」と彼女は言った。

「今からでも遅くはありませんよ」と僕は言った。

「私にはわかるのよ。私には何も書けないって教えてくれたのはあなたなのよ」と彼女は言って笑った。「あなたに手紙を書いているうちに、それがよく分かったのよ。自分にはそういう力はないんだって」

僕は赤くなった。今ではそんなことはほとんどないけれど、二十二のころ、僕はすぐに赤くなった。「でも、あ

あなたの文章にはとても正直なところがありましたよ」と僕は言った。

彼女は何も言わず口もとに微笑を浮かべた。とても小さな微笑だった。

「少なくとも僕はあなたの手紙を読んでハンバーグ・ステーキを食べたいと思った」

「きつとその時おなががすいてたのよ」と彼女はやさしく言った。

まあ、そうかもしれない。

電車がかたかたという乾いた音をたてて窓の下を通り過ぎていった。

*

時計が五時を打った時、そろそろ失礼しなくちゃと僕は言った。「御主人が帰って来る前に夕食の仕度をしなくちゃいけないでしょ？」

「主人はととても遅いの」と彼女は頬杖をついたまま言った。

「真夜中より前には帰ってこないのよ」

「ずいぶん忙しいんですね」**98**

「そうね」と言って、彼女はしばらく間を置いた。

「手紙にも一度書いたと思うけれど、主人とはいろんなことがうまく話しあえないの。気が伝わらないのよ。

あの人と話していると、お互いにまるで違う言葉で話をしてるみたいに見えることがよくあるの」

どう答えていいのか僕にはよくわからなかった。そういう風に気持ちを伝えられない相手と一緒に暮らしているということじたいが僕にはうまく理解できなかったのだ。

「でも、いいの」と彼女は静かに言った。本当にそれでもいいみたいに聞こえた。「長いあいだ手紙を書いてくれてありがとう。とても楽しかったわ。あなたのところへ手紙を書いたことで、私はなんだかずいぶん救われたのよ」と彼女は言った。

「僕も楽しかったですよ」と僕は言った。でも正直に言って、彼女がどんな手紙をどんな文章で書いていたのか、僕にはほとんど思い出せなかった。

彼女は何も言わずに、壁にかかった時計をしばらく見ている。まるで時間の流れかたを点検しているみたいに。「大学を出たらどうするつもりなの？」と彼女は僕に訊ねた。

何も決めてないのだと僕は言った。自分が何をすればいいのかもよくわからないのだ、と。僕がそう言うとき彼女はまた微笑んだ。「私は思うんだけど、あなたは何か文章を書く仕事につくといんじゃないかしら。あなたが講評のときにくれる手紙はとても素敵だったから。私はあれをすごく楽しみにしていたのよ。本当に。お世辞じゃなくて。あなたはそれをただ単にアルバイトのノルマとして書いていたのかもしれないけれど、でもあそこには何か心がこもったものが感じられたのよ。ぜんぶちやんとまとめて取ってあるし、ときどき取り出して読みなおしているのよ」**99**

「ありがとう」と僕は言った。「それからハンバーグ・ステーキをどうもご馳走さま」

*

十年たった今でも小田急に乗って彼女のマンションの近所を通るたびに、彼女とあのかりつとしたハンバーグ・ステーキのことを思い出す。僕は線路沿いに並んだマンションの建物を眺め、あれはどの窓だったかなと思う。彼女の家の窓から見えた風景を思い出し、あれはどのあたりだったかな、と考えてみる。でも僕にはもうぜんぜん思い出せない。

あるいは彼女はもうそこには住んでいないかもしれない。でももしまだそこに住んでいたら、その窓の奥で彼女は今でも一人でバート・バカラックの同じレコードを聴きつづけているんじゃないかという気がする。僕はあの時彼女と寝るべきだったんだろうか？

これがこの文章のテーマだ。

その答えは僕にはわからない。今でもぜんぜんわからない。どれだけ歳年をとっても、どれだけ経験をかさねても、わからないことはいっぱいある。僕はただ電車の窓からそれらしい建物の窓をじっと見上げるだけだ。すべての窓がああ彼女の住んでいた部屋の窓であるように思えることもある。そしてどの窓もぜんぶ違う窓であるようにも。そこにはあまりにも多くの窓があるのだ。

91

拝啓

寒さも日一日とやわらぎ、日差しの中に微かな春の匂いが感じられる今日このごろとなりました。いかがお過ごしでしょうか。お元気ですか。

先日のお手紙楽しく拝見させて頂きました。とくにハンバーグ・ステーキとナツメグの関係についてのくだりは生活感にあふれたなかなか良い文章だと思います。台所の暖かい匂いや玉ねぎを切るとんという包丁の音が生きて感じられるのです。そういうところが一箇所でもあると、文章が生きてきます。

あなたのお手紙を読んでいるうちにハンバーグ・ステーキがたまらなく食べたくなり、さっそくその夜近所のレストランに行つて注文してみました。そのレストランには実に八種類ものハンバーグ・ステーキがありました。テキサス風とか、カリフォルニア風とか、ハワイ風とか、日本風とか、そういった感じですが。テキサス風というのはとても大きいんです。それだけのことです。そんなことを知ったら、テキサスの人たちはきつとびっくりしちゃうでしょうね。ハワイ風というのは、パイナップルがあしらつてあります。カリフォルニア風というのは……忘れしました。日本風には大根おろしがついています。店は洒落た作りで、ウェイトレスはみんなけっこう可愛くて、とても短かいスカートをはいています。

しかし僕はなにもレストランの内装の研究をしたり、ウェイトレスの下着脚を眺めたりするためにそこに行つたわけではありません。僕はただハンバーグ・ステーキを、それもなに風でもないごく単純なハンバーグ・ステーキを食べに行つたのです。

僕、僕はウェイトレスにそう言いました。僕が食べたものはごく普通のハンバーグ・ステーキなのだ。

申しわけないありませんが当店にはなにに風ゆというハンバーグ・ステーキしかないのです、とウェイトレスは答えました。

でももちろんウェイトレスを責めることはできません。彼女がメニューを決めるわけでもないし、彼女が好んで食器を下げるたびにボシキもが見えちゃうような制服を着ているわけでもないからです。ですから、僕はにっこり笑つてハワイ風ハンバーグ・ステーキというのを注文しました。食べる時にパイナップルをどけちやえばいいのよ、と彼女が教えてくれたのです。

世の中というのは奇妙な場所です。僕が本当に求めているのはごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなのに、それがあつた時にはパイナップル抜きでハワイ風ハンバーグ・ステーキという形でしかもたらされないので。

ところであなたの作つたのは、ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなんですか、しょうね？ 手紙を読んでいて、僕はあなたの作つたごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを是非食べてみたくなりました。

それに比べると国電の切符自動販売機についての文章は少し上すべりではないかという気がします。目のつけどころは面白いと思うのですが、風景が読み手に伝わつてこないのです。どうか鋭くあるうと思わないで下さい。文章というのは結局は間にあわせのものなんのです。

全体としての今回の手紙の点数は70点というところですが、少しずつ文章力は上がっています。焦らず、焦らず、がんばつて下さい。次の手紙を楽しみにしています。

3月12日

93

P・S・

「クッキー」の詰めあわせ、どうもありがとうございます。おいしく頂いております。しかし当会の規則上、手紙以外の個人的な交流は一切禁じられておりますので、今後このようなお気遣いなきようお願いいたします。でもとにかく、ありがとうございます。

P・S・

前々回の御手紙にありました御主人との「精神的なレベル」のこと、上手く解決するといいですね。

*

といったアルバイトを僕は一年ばかりつづけた。二十二歳のまわりのことである。

僕は飯田橋にある「ペン・ソサエティー」という名前のわけのわからない小さな会社と契約していて、一通二千元の約束でひと月に三十通以上のこれと似たりよつたりの手紙を書きまくった。

「あなたも相手の心に響く手紙を書けるようになります」というのがこの会社のキャンチ・フレーズだった。入会者は入会金と月謝を払い、月に四通の手紙を「ペン・ソサエティー」あてに書く。それに対して我々「ペン・マスター」が添削をし、前にあげたような感想と指導の手紙を書くのである。僕は文学部の学生課で募集の貼り紙を見てその会社の面接試験を受けにいった。僕はいろんな事情があつて、大学を留年することが決まったばかりだった。親は留年するのなら来年から仕送りを減らすと通知してきた。それで当然のことながら僕は真剣に生活費を稼ぐ必要に迫られていたのだ。面接試験があり、いくつか作文を書き、そして一週間後に僕は採用された。それから一週間かけて専門の指導員に添削のこつや、指導のノウハウや、さまざまな心得を教えられた。それはとくにむずかしいことではなかった。

女性の会員には男性の、男性の会員には女性の「ペン・マスター」がつく。僕の引き受けた会員はのべ94名、二十四人で、年齢層は下は十四歳から上は五十三歳まで、中心は二十五歳から三十五歳までの女性だった。つまり殆どの会員が僕より年上ということになる。それではじめの一ヵ月ばかり、僕はひどく混乱することになった。なぜなら会員の多くは僕よりずっと文章が上手く、ずっと手紙を書き慣れていたので。僕といえ、それまでまともな手紙なんて殆ど書いたこともないときている。僕

は冷や汗を流しながら最初の一カ月をなんとかやりすぎた。きつと何人かは——それは会員の権利として会則にもうたわれていたことなだけけれど——ペン・マスターの交換を求めてくるだろうと、僕は覚悟を決めていた。しかし一カ月たっても誰ひとりとして僕の文章能力に不満を洩らす会員は現われなかった。それどころか、僕の評判は上々である、と会社の人は僕に教えてくれた。そして三カ月後には僕の「指導」によって会員たちの文章力も向上してきているようにさえ思えてきた。不思議なものである。彼女たちは心の底から僕を教師として信頼しているようだった。そう思うと、僕も講評の手紙をそれまでよりずっと気楽にのびのびと書けるようになった。

その頃の僕にはわかちなかつたけれど、今になって考えてみればみるとわかるのだけれど、彼女たちはみんな淋しかったんだわろと思ふのだ。彼女たちは（あるいは彼らは）ただ誰かに何かを書いてみたかったというだけのことだったのだ。そしてまわるとお互いがお互いを許しあふことを求めていたのだわろ。そして——その頃の僕には信じられないことだったのだが——彼女たちにはその手紙を出すべき相手さえみつけれなかつたのだ。彼女たちはラジオのディスク・ジョッキーに手紙を出すタイプではなかつた。彼女たちはもつとパーソナルなものを求めていたのだ。たとえそれが「添削」や「講評」のようなものであつたとしてもだ。

僕はそんな具合に二十一年の冬から二十二年の春まで二十代の初めの歳月を、卑の悪い片足のおつとせいみたい

にその微温的な手紙のハレムの中で過した。会員たちは実にいろんな手紙を僕あてに送ってくれた。退屈な手紙があり、ほほえましい手紙があり、95悲しい手紙があつた。その十年間のあいだに僕はなんだか、十三年ぶるまどめて年をとつてしまつたよな気がすむ。ずいぶん昔のことだし、残念ながら彼女たちの手紙は手元に取つてないので（それは規則としてぜんぶ会社に返還しなくてはならなかつた）、はっきりと具体的には思い出せないのだが、そこには実にいろんな種類の人生の事象が——ひどく大きなことからひどく細かいことまで——ちりばめられ、詰め込まれ、放り出されていたように記憶している。彼女たちの伝えるそれらのメッセージは僕には、二十一歳か二十二歳の大学生にとつては、奇妙に非現実的なものを感じられた。それらはおおかたの場合リアリティーというものを欠いているように思えたし、ある場合には全面的に無意味なことであるようにも思えた。でも僕に人生の経験が欠けているということだけがその原因ではなかつた。今になってみればわかるのだけれど、ほとんどの場合、物事のリアリティーというのは伝えるべきものではないのだ。それは作るべきものなのだ。そして意味というのはそこから生まれるものなのだ。でももちろん僕にはそんなことはわからなかつたし、彼女たちにもわからなかつた。それも、それらの手紙に書かれたすべての物事が、僕の目に奇妙に平板に映つた原因のひとつだつたと思う。

わけあつてそのアルバイトを辞めることになつた時、僕の指導していた会員たちはみんな残念がつてくれた。僕もある意味では——手紙を書きつづけるという作業には正直なところ少々うんざりはしていたけれど——残念だつた。多くの人々がこれほどまで僕に対して正直になつてくれるチャンスなんて、この先二度とないような気がしたからだ。

*

ハンバーグ・ステーキに関していえば、僕は彼女最初の手紙の女性の作つたハンバーグ・ステーキを食べることができた。

彼女は三十二歳で子供はなく、夫は世間では五番めくらに有名な商事会社につとめていた。僕が最後の96手紙に残念ながら今月いっぱいでの仕事を辞めることになつたと書いた時、彼女は僕を昼食に招待してくれた。ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを作ります、と彼女は書いていた。会の規則には反していたけれど、僕は思いきつて行つてみることにした。何ものも二十二歳の青年の好奇心を押しとどめることはできない。

彼女のマンションは小田急の沿線にあつた。子供のいない夫婦にふさわしく、さつぱりとした部屋だつた。家具も照明も彼女のセーターも、高価ではないけれど感じの良いものだつた。僕は彼女が思つていたよりずっと若々しくみえることに、彼女は僕が思つていたよりずっと若いことに驚いた。彼女は僕を自分より年上の男だと思つていた。「ペン・ソサエティー」は「ペン・マスター」の年齢をあかささないのだ。

しかしお互いに一度ずつ驚いてしまうと、初対面の緊張はほぐれた。我々は同じ列車に乗り遅れてしまつた乗客同士といつた雰囲気だ。ハンバーグ・ステーキを食べ、コーヒを飲んだ。列車といえ、彼女の部屋のある三階の窓からは電車の線路が見えた。その日はとても良い天気だ、まわりのアパートのベランダは布団やシーツでいっぱいだつた。時折布団を叩く音がたばたばたという音がした。僕はその音を今でも思い出せる。それは枯れた井戸の底から聴こえてくるよな奇妙に距離感のない音だつた。

ハンバーグ・ステーキの味は素敵だつた。香辛料がほどよくきいて、かりつとこげた表面の内側には肉汁がたつぷりとつまつていた。ソースの具合も理想的だつた。正直に言つて、こんなに美味しいハンバーグ・ステーキを食べたのは生まれて初めてとは言えないにせよ、実に久しぶりのことだつた。僕がそう言つと、彼女は喜んだ。

我々はコーヒを飲んでしまうと、バート・バカラツクのレコードを聴きながら身の上話をした。とはいつても僕には身の上話というほどのものはないから、ほとんど彼女がしゃべつた。学生時代は作家になりたかつたの、と彼女は言つた。彼女はフランソワーズ・サガンのファンで、僕にサガンの話をしてくれ97た。彼女は「ブルームスはお好き」が気に入つていた。僕もサガンは嫌いではない。少なくともみんなが言うほど退屈だとは思わない。誰もがヘンリー・ミラーやジャン・ジュネみ

たいな小説を書かなくてはならないという規則はないのだ。

「でも私には何も書けないわ」と彼女は言った。

「今からでも遅くはありませんよ」と僕は言った。

「私にはわかるのよ。私には何も書けないって教えてくれたのはあなたなのよ」と彼女は言つて笑つた。「あなたに手紙を書いているうちに、それがよく分かつたのよ。自分にはそういう力はないんだつて」

僕は赤くなつた。今ではそんなことはほとんどないけれど、二十二のころ、僕はすぐに赤くなつた。「でも、あなたの文章にはとても正直なところがありましたよ」と僕は言った。

彼女は何も言わず口もとに微笑を浮かべた。 **十センチの何分の十かの下**、とても小さな微笑だつた。

「少なくとも僕はあなたの手紙を読んでハンバーグ・ステーキを食べたいと思つた」

「きつとその時おなががすいてたのよ」と彼女はやさしく言つた。

まあ、そうかもしれない。

電車がかたかたという乾いた音をたてて窓の下を通り過ぎていった。

*

時計が五時を打つた時、そろそろ失礼しなくちやと僕は言つた。御主人が帰つて来る前に夕食の仕度をしなくちやいけないでしょ？」

「主人はととても遅いの」と彼女は頬杖をついたまま言つた。

「**いや**も真夜中にしか帰らないわより前には帰つてこないのよ」

「ずいぶん忙しいんですね」 **98**

「そうね」と言つて、彼女はしばらく間を置いた。

「それ下手紙にも一度書いたと思うけれど、私たちの仲はあまりうまく行つてないの主人とはいろんなことがうまく話しあえないの。気持ちが伝わらないのよ。あの人と話していると、お互いにまるで違う言葉で話しているみたいに思えることがよくあるの」

どう答えていいのか僕にはよくわからなかつた。そういう風に気持ちを伝えられない相手と一緒に暮らしているということじたいが僕にはうまく理解できなかったのだ。「でも、いいの」と彼女は静かに言つた。本当にそれでいいみたいに聞こえた。「長いあいだ手紙を書いてくれてありがとう。とても楽しかつたわ。あなたのところに手紙を書いたことで、私はなんだかずいぶん救われたのよ」と彼女は言つた。

「僕も下手楽しかつたですよ」と僕は言つた。でも正直に言つて、彼女がどんな手紙をどんな文章で書いていたのか、僕にはほとんど思い出せなかつた。

彼女は何も言わずに、壁にかかつた時計をしばらく見ていた。まるで時間の流れかたを点検しているみたいに。「大学を出たらどうするつもりなの？」と彼女は僕に訊ねた。

何も決めてないのだと僕は言つた。自分が何をすれば

いいのかもよくわからないのだ、と。僕がそう言うとなら女はまた微笑んだ。「私は思うんだけど、あなたは何か文章を書く仕事につくといんじやないかしら。あなたが講評のときにくれる手紙はとても素敵だつたから。私にはあれをすごく楽しみにしていたのよ。本当に。お世辞じゃなくて。あなたはそれをただ単にアルバイトのノルマとして書いていたのかもしれないけれど、でもあそこには何か心がこもつたものが感じられたのよ。ぜんぶちやんとまとめ取つてあるし、ときどき取り出して読みなおしているのよ」 **99**

「ありがとう」と僕は言つた。「それからハンバーグ・ステーキをどうもありがとうと馳走さま」

*

十年たった今でも小田急に乗つて彼女のマンションの近所を通るたびに、彼女とあのかりつとしたハンバーグ・ステーキのことを思い出す。僕は線路沿いに並んだマンションの建物を眺め、あれはどの窓だつたかなと思つた。彼女の家の窓から見えた風景を思い出し、あれはどのあたりだつたかな、と考へてみる。でも僕にはもうぜんぜん思い出せない。

あるいは彼女はもうそこには住んでいないかもしれない。どの窓かはお忘れしてしまったけれど、でもしまだそこに住んでいるとしたら、その窓の奥で彼女は今でも一人でバート・バカラックの同じレコードを聴きつづけているんじゃないかという気がする。

僕はある時彼女と寝るべきだつたんだろうか？

これがこの文章のテーマだ。

その答えは僕にはわからない。今でもぜんぜんわからない。どれだけ歳年をとつても、どれだけ経験をかさねても、わからないことはいっぱいある。僕はただ電車の窓からそれらしい建物の窓をじつと見上げるだけだ。すべての窓があつた彼女の住んでいた部屋の窓であるように思えることもある。そしてどの窓もぜんぶ違う窓であるようにも。そこにはあまりにも多くの窓があるのだ。

バート・バカラックは好き？

村上春樹

95

拝啓

寒さも一日とやわらぎ、日差しの中に微かな春の匂いが感じられる今日このごろとなりました。いかがお過ごしでしょうか？

先日のお手紙楽しく拝見させて頂きました。とくにハンバーグ・ステーキとナツメグの關係についてのくだりは生活感にあふれたなかなか良い文章だと思います。台所の暖かい匂いや玉ねぎを切るとんという包丁の音が生き生きと感じられるのです。

あなたのお手紙を読んでいるうちにハンバーグ・ステーキがたまらなく食べたくなり、さつそくその夜レストランに行って注文してみました。そのレストランには実に八種類ものハンバーグ・ステーキがありました。テキサス風とか、カリフォルニア風とか、ハワイ風とか、日本風とか、そういった感じですが、テキサス風というのはとても大きいんです。それだけのことで、ハワイ風にはパイナップルがあしらってあります。カリフォルニア風というのは……忘れしました。日本風には大根おろしがついています。店は洒落たつくりで、ウエイトレスはみんな可愛く、とても短かいスカートをはいています。しかし僕はなにもレストランの内装の研究をしたり、ウエイトレスの下着を眺めたりするためにそこに行ったわけではありません。僕はただハンバーグ・ステーキを、それもなに風でもないごく単純なハンバーグ・ステーキを食べに行っただけです。

で、僕はウエイトレスにそう言いました。申しわけないが当店にはなになに風のハンバーグ・ステーキしかないのだ、とウエイトレスは答えました。

でももちろんウエイトレスを責めることはできません。彼女がメニューを決めるわけでもないし、彼女が好んで食器を下げるたびにパンティーが見えちゃうような制服を着ているわけでもないからです。ですから、僕はにっこり笑ってハワイ風ハンバーグ・ステーキというのを注文しました。食べる時にパイナップルをどけちゃえばいいのよ、と彼女が教えてくれたのです。

世の中というのは奇妙な場所です。僕が本当に求めているのはごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなのに、それがある時にはパイナップル抜き、ハワイ風ハンバーグ・ステーキという形でしかもたらされないのです。

ところであなたの作ったのは、ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなんですか？ 手紙を読んでいて、僕はあなたの作ったごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを是非食べてみたいくなりました。

それに比べて国電の切符自動販売機についての文章は少し上すべりではないかという気がします。目のつけどころは面白いのですが、風景が読み手に伝わってこな

いのです。どうか鋭くあらうと思わないで下さい。文章というのは結局は間にあわせのものなんです。

全体としての今回の手紙の点数は70点というところですが、少しづつ文章力は上がっています。焦らず、焦らず、がんばって下さい。次の手紙を楽しみにしています。はやく本物の春が来るといいですね。

3月12日

P・S・

「クッキー」の詰めあわせ、どうもありがとうございます。おいしく頂いております。しかし当会の規則上、手紙以外の個人的な交流は一切禁じられておりますので、今後このようなお気遣いなきようお願いいたします。

でもとにかく、ありがとうございました。

98

P・S・

前々回の御手紙にありました御主人との「精神的トラブル」のこと、上手く解決するといいですね。

☆

といったアルバイトを僕は一年ばかりつづけた。二十二歳のころのことである。

僕は飯田橋にある「ペン・ソサエティー」という名前のわけのわからない小さな会社と契約していて、一通二千円の約束でひと月に三十通以上のこれと似たりよつたりの手紙を書きまくった。

「あなたも相手の心に響く手紙を書けるようになります」というのがこの会社のキャンチ・フレーズだった。入会者は入金と月謝を払い、月に四通の手紙を「ペン・ソサエティー」あてに書く。それに対して我々「ペン・マスター」が添削をし、前にあげたような感想と指導の手紙を書くのである。

女性の会員には男性の、男性の会員には女性の「ペン・マスター」がつく。僕の引き受けた会員はのべ二十四人で、年齢層は下は十四歳から上は五十三歳まで、中心は二十五歳から三十五歳までの女性だった。つまり殆どの会員が僕より年上ということになる。それではじめの一カ月ばかり、僕はひどく混乱することになった。なぜなら会員の多くは僕よりずっと文章が上手く、ずっと手紙を書き慣れていたのである。僕といえば、それまでもな手紙なんて殆ど書いたこともないときている。僕は冷や汗を流しながら最初の一カ月をなんとかやりすごした。

しかし一カ月たつても誰ひとりとして僕の文章能力に不満を洩らす会員は現われなかった。それどころか、僕の評判は上々である、と会社の人は僕に教えてくれた。そして三カ月後には僕の「指導」によって会員たちの文章力も向上してきているようにさえ思えてきた。不思議なものである。彼女たちは心の底から僕を教師として信頼しているようだった。

その頃の僕にはわからなかったけれど、今になって考

えてみれば彼女たちはみんな淋しかったんだろうと思う。ただ誰かに何かを書いてみたかったというだけのことだったのだ。そしてきつとお互いがお互いを許しあうことを求めているのだろう。

僕はそんな具合に二十一の冬から二十二の春までを、足の悪いおつとせいみたいに手紙のハレムの中で過ごした。

会員たちは実にいろんな手紙を僕あてに送ってくれた。退屈な手紙があり、**100** ほほえましい手紙があり、悲しい手紙があった。その一年間のあいだに僕はなんだか二、三年ぶんまとめて年をとってしまったような気がする。

わけあってそのアルバイトを辞めることになった時、僕の指導していた会員たちはみんな残念がってくれた。

僕もある意味では——手紙を書きつづけるといふ作業には正直なところ少々うんざりはしていたけれど——残念だった。多くの人々がこれほどまで僕に対して正直になってくれるチャンスなんて、この先二度とないような気がしたからだ。

☆

ハンバーグ・ステーキに関していえば、僕は彼女(最初の手紙の女性)の作ったハンバーグ・ステーキを食べることができた。

彼女は三十二歳で子供はなく、夫は世間では五番めくらいに有名な商事会社につとめていた。僕が最後の手紙に残念ながら今月いっぱいこの仕事を辞めることになったと書いた時、彼女は僕を昼食に招待してくれた。ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを作ります、と彼女は書いていた。会の規則には反していたけれど、僕は思いついて行ってみることにした。何もかも二十二歳の青年の好奇心を押しとどめることはできない。**101**

彼女のマンションは小田急の沿線にあった。子供のいない夫婦にふさわしく、さっぱりとした部屋だった。家具も照明も彼女のセーターも、高価ではないけれど感じの良いものだった。僕は彼女が思っていたよりずっと若々しくみえることに、彼女は僕が思っていたよりずっと若いことに驚いた。「ペン・ソサエティー」は「ペン・マスター」の年齢をあかささないのだ。

しかしお互いに一度ずつ驚いてしまうと、初対面の緊張はほぐれた。我々は同じ列車に乗り遅れてしまった乗客同士といった雰囲気だ。ハンバーグ・ステーキを食べ、コーヒーを飲んだ。三階の窓からは電車が見えた。その日はとても良い天気だ、まわりのアパートのペランダは布団やシートでいっぱいだった。時折布団を叩くばたばたという音がした。枯れた井戸の底から聴こえてくるような奇妙に距離感のない音だった。

ハンバーグ・ステーキの味は素敵だった。香辛料がほどよくきいて、かりつとこげた表面の内側には肉汁がたっぷりとつまっていた。ソースの具合も理想的だった。僕がそう言うと、彼女は喜んだ。

我々はコーヒーを飲んでしまうと、バート・バカラックのレコードを聴きながら身の上話をした。とはいっても僕には身の上話というほどのものはないから、ほとんど彼女がしゃべった。学生時代は作家になりたかったの、と彼女は**102** 言った。彼女はフランソワーズ・サガンのファンで、僕にサガンの話をしてくれた。彼女は『ブームスはお好き?』が気に入っていた。僕もサガンは嫌いではない。少なくともみんなが言うほど退屈だとは思わない。

「でも私には何も書けないわ」と彼女は言った。

「今からでも遅くはありませんよ」と僕は言った。

「私には何も書けないって教えてくれたのはあなたなのよ」と彼女は言って笑った。

僕は赤くなった。二十二のところ、僕はすぐに赤くなつた。「でも、あなたの文章にはとても正直なところがありましたよ」

彼女は何も言わず口もとに微笑を浮かべた。一センチの何分の一かの、とても小さな微笑だった。

「少なくとも僕はあなたの手紙を読んでハンバーグ・ステーキを食べたいと思った」

「きつとその時おなががすいてたのよ」と彼女はやさしく言った。

まあ、そうかもしれない。

電車がかたかたという乾いた音をたてて窓の下を通り過ぎていった。**103**

☆

時計が五時を打った時、そろそろ失礼しなくちゃと僕は言った。「御主人が帰って来る前に夕食の仕度をしなくちやいけないんですよ?」

「主人はともとても遅いの」と彼女は頬杖をついたまま言った。

「いつも真夜中にしか帰らないわ」

「忙しいんですね」

「そうね」と言って、彼女はしばらく間を置いた。

「それに手紙にも書いたと思うけれど、私たちの仲はあまりうまく行っていないの」

どう答えていいのか僕にはよくわからなかった。

「でも、いいの」と彼女は静かに言った。本当にそれでもいいみたいに聞こえた。「長いあいだ手紙をありがとう。とても楽しかったわ」

「僕もです」と僕は言った。「それからハンバーグ・ステーキをどうもありがとう」

☆

104

十年たった今でも小田急に乗って彼女のマンションの近所を通るたびに、彼女とあのかりつとしたハンバーグ・ステーキのことを思い出す。どの窓かはもう忘れてしまったけれど、その窓の奥で彼女は今も一人でバート・バカラックを聴きつづけているんじゃないかという気が

する。

僕はその時彼女と寝るべきだったんだらうか？

これがこの文章のテーマだ。

僕にはわからない。

歳をとってもわからないことはいっぱいある。